

## 「白山自然保護調査研究会」平成28年度委託研究成果要約

### 1. 白山東麓の降下火山灰層からみた白山火山の噴火活動

代表者 酒寄淳史

参加者 守屋以智雄

協力者 奥野 充・田島靖久

(現地調査)

白山火山の東側に位置する大倉山周辺の露頭において、3回のマグマ噴火イベントによる降下火砕堆積物を確認した。それらは下位より、南竜火山灰層に相当する降下スコリアと細粒火山灰層の互層、安山岩質火山礫～火山灰を主体とした層厚約2cmの降下堆積物、および層厚約11cmの降下スコリアである。

(分析調査)

前述の露頭から採取した土壌試料の<sup>14</sup>C年代測定、および本質火砕物試料の偏光顕微鏡観察とモード組成分析を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

南竜火山灰相当層の直下の土壌試料からは2,400yrBPの<sup>14</sup>C年代が得られた。南竜火山灰相当層のスコリアは、御前峰の南斜面に露出するスコリアと似た岩石学的性質を示し、これまで同時期の噴出物と考えられてきた白水滝溶岩類よりも苦鉄質なマグマから由来したことを示唆する。南竜火山灰相当層の上位にある安山岩質火山礫～火山灰を主体とした降下火砕堆積物は、岩石学的性質の類似性から、御前峰上部溶岩類あるいは剣ヶ峰溶岩類の活動に伴う爆発的噴火によって形成された可能性が考えられる。最も上位に位置する降下スコリア層は、その直下と直上の土壌試料の<sup>14</sup>C年代から、1,900～1,010yrBPの間に起こった噴火による産物であることが明らかになった。このスコリアは斜長石斑晶に極めて乏しく、かんらん石に著しく富むなど白山火山噴出物の中では特異な岩石学的性質を有する。このスコリアの供給源はもとより、白山火山本体においてこの噴火に対応する噴出物は知られていない。

### 2. 北部白山山系に生息するニホンザルの生息状況について

代表者 滝沢 均

参加者 伊沢絃生

協力者 志鷹敬三 他11名

1) 2016年冬、手取川水系で観察された群れの動向  
滝沢 均, 伊沢絃生他

2016年冬は蛇谷や中ノ川、尾添川、雄谷、目附谷、手取川本流などで観察できた12群から検討を加えた。

2016年冬観察できた群れの個体数はおおむね30頭から60頭台で、群れとしては非常に落ち着いた状況で推移していると推察された。これは群れ同士の関係やこれらの群れが分布している地域の環境収容力(資源量)が影響していると考えられた。

2016年冬の調査でカウントされたアカンボウの数と過去を比較してみると、2012年冬15群23頭、2013年冬15群23頭、2014年冬14群77頭、2015年冬12群21頭、そして2016年冬12群78頭であった。そして、各冬の観察個体数に占めるアカンボウの割合は、それぞれ15.3%、4.5%、13.5%、6.6%、17.1%となり、白山地域のオトナメスの出産間隔は2年に一度であることで、2016年は多くのアカンボウが産まれた年となった。暖冬傾向が続いている昨今、生まれてきたアカンボウが大量に死亡等で消失することは少なくなってきたと推測され、アカンボウの増減やこのアカンボウが妊娠可能な年齢まで成長し、繁殖に貢献する場合が増加すると考えられるため、個体数や群れ数の増加傾向を一段と強めていくことも可能性として推測される。一方で、この地域の環境収容力に限界もあり、白山麓から生息域を拡大していく可能性もある。

手取川水系で2016年冬調査対象になった地域の総個体数を検討してみる。今冬のデータおよび過去10年のデータを参考にしながら推計してみると、今冬の観察総個体数は509頭で、この数値を参考に、上流域のカムリA1群やカムリC群等から下流域のタイコA21群やタイコA4群等までの総個体数(追従オスやハナレザル、オスグループを除く)を試算したところ、785頭から825頭だった。これに追従オスやハ

ナレザル、オスグループを加えると1,000頭前後になるのではないかと推測された。下流域に進出した群れも含めると、優に1,000頭を超える個体群が存在することになり、今後も注意が必要である。

2016年冬、カムリD1群でサブグループピングが観察された。50頭 +  $a$  と13頭 +  $a$  の2グループである。最大1 km以上離れて移動した時もあった。この要因として尾添川の雨による増水が考えられるが、直接の要因が増水でない場合、群れの分裂の予兆とも考えられる。

白山地域には、現時点でも多くの群れが存在し、特に冬期間には下流域の狭い地域にこれらの多くの群れが集中している状況である。今後、ますます群れが増加することで、この地域の各群れによる土地利用の様子や群れ間関係も変わってくると推測される。さらに、この地域からはじき出されて分布域を拡張することも考えられる。そのため、白山地域以外の山間地域でのデータの蓄積が必要になってくるであろう。

## 2) 2016年冬、犀川水系で観察された群れについて

滝沢 均, 志鷹敬三他

2016年12月に犀川ダム周辺で1群、2017年1月には犀川ダムより下流域で同時に2群観察された。これらの群れの関係性は不明である。12月の群れと1月の2群のうちどちらかと同一なのか、まったく違

うのか、或いは1月の2群はサブグループピングしているだけで一つの群れで、12月の群れと同一なのか、まったく違うのか等、色々考えられる。また、1998年に観察された42頭のアゲハラ群との関係も不明である。

20年近く立って、いまだに犀川ダムの下流域に2群（最大値で）しか観察されないということは、手取川水系の個体群の変動とは明確な違いがある。白山山系という一体とした自然環境と考えてきたが、実際のところ、2つの水系に何らかの違いがあるのだろうか。今後明らかにしていかなければならない課題である。

ところで、犀川ダムの上流域まで調査できないが、上流域には個体数や群れ密度の高い地域がある可能性もあり、上流域の調査をどうするのか検討しなければならない。

## 3) ニホンザルの保護・管理について

滝沢 均, 伊沢紘生他

石川県内でも徐々に野生ニホンザル個体群の分布域拡大が顕著になってきている。また、白山地域では、個体数や群れの増加が確実に、特に冬期間、非常に密度の高い状況に陥っており、今後、更なる分布域の拡大が発生する恐れがあることが指摘でき、今後の管理計画にも影響してくるものと推測される。